美術の窓（174）

大名狂歌師、有歓堂

大和文華館館長 浅野秀剛

昨年の夏に大和文華館で「摺物」展、あべのハルカス美術館で「広重」展を開催した関係で、今でもその周辺の事象が気になって仕方がない。１年前の美術の窓（169）に「八陣亭堅城と広重」という小文を書いた。その八陣亭堅城は狂歌師で、広重と仲が良い江戸に住む武士と推定されるが、同じ武士でも「有歓堂」は大名である。広重と昵懇だったとまでは言わないが、それなりの付き合いはあったと推定される。

有歓堂は、天保3年（1832）刊と推定される、の一連編、広重画『の一月並画讃集』（図）に、「賛馬窓鈴麻呂公（さんばそうすずまるこう）」「賛馬窓鈴麿公」「鈴麻呂公」「鈴麻呂君」、そして天保3年師走序刊、淮南堂・秋長堂・四方瀧水編、竹内眉山画『俳諧歌彼賀古登集』に、「賛馬窓鈴丸君」「鈴丸君」という狂歌名で登場する。狂歌名の全部に「公」「君」が付いているので、かなりの身分の武士であることは瞭然である。その翌年、天保4年2月7日に、の一連を主宰した淮南堂眉住がなくなり、同年5月20日に追悼する狂歌会が開催され、その記録をもとに、追善狂歌集『墨田川余波』が刊行されるが、それには「賛馬窓鈴麿」と記されている。追悼狂歌集なのでさすがに「公」「君」は付けていない。淮南堂眉住の没後の天保6年（1835）に刊行された『墨水淮南堂詠草　松の烟』は、門弟の「風月庵友俊改眉住」が「眉住」号を継いだ記念に、眉住の事蹟を友俊がまとめたものであるが、その巻尾に、「判者びらきの莚へ讃馬窓君いらせ給ふはうれしくも思ありて　面箱のひもゆふぐれになるまでもあかずおはせしことのかしこき」とある「讃馬窓君」がその人である。したがって、賛馬窓鈴丸が淮南堂眉住門であったことは確実となる。

鈴丸は、その後まもなく、「賛馬窓鈴丸」を「有歓堂鈴丸」に改名した。天保6年3月序刊、風月庵眉住・四方瀧水編、竹内眉山画『職人尽花月集』に「有歓堂君」なる人物が登場する。見返しに「天保六乙未穐新鐫」、跋が天保7年正月となっている、緑樹園元有撰、存斎光一画『狂歌鯉鱗集』には「有歓堂君」の肖像めいた図が載るが、それは大名風である。天保6、7年頃刊、広重画『狂歌秋の寝覚』では、他の淮南堂眉住門の狂歌師と並び「有歓堂大君」として撰者となっている。賛馬窓と有歓堂が同一人物であることは、天保9年秋の刊記を持つ『桜間狂歌集』の序に「天保丁酉（筆者注、天保8年）首夏　有歓堂主人しるす」と記し、鈴の図の中に「麿」の字を入れた印を捺していることから揺るがないと思う。狂歌集以外では、淮南堂眉住門の狂歌師、大盃堂呑升が企画・開板した、広重画の横大判錦絵8枚揃「江戸近郊八景」に付された狂歌丁に「有歓堂君」の名を見出すことができる。その後の狂歌集の調査は行き届いていないが、探せばかなりのものに名を見出すことができるかもしれない。特筆すべきは、弘化3年序刊（水鳥堂序）、広重画『狂歌作者細見』では「有歓堂大君」「有歓堂君」として撰者となって遊女屋に擬えた見世を構えていることであろう。その見世の暖簾印（花押）は「の一」である。

有歓堂は、摺物にも狂歌を寄せている。確認できたもので最も早いのは、広重画「雪の門松に犬」（長判、天保9年）で、「炮洲總連」の企画。その巻頭に「有歓堂（花押）」と「菊花園」の狂歌が載る。次は、広重画「朝比奈図」（中広奉書全紙判、天保11年）で、二代目桜川慈悲成襲名披露の、60余人の狂歌（一部は発句）が並ぶ大型の摺物。そこに別格として「狂歌堂君」「有歓堂君」「花廼春人君」という3人の大名狂歌師が並んでいる。さらに、広重画「屠蘇酒と重箱」（長判、弘化4年［1847］）の17人17首が並ぶ巻頭に別格扱いで「有歓堂」と「花月庵雪友」の狂歌が、広重画「新年の猿回し」（横中判、弘化5年）に「有歓堂（「の一」の花押）」と「河辺廼凉」の狂歌が載っている。気になるのは、「雪の門松に犬」の花押と「門松に猿回し」の花押が異なることである。「の一」の花押は「の一連」の紋であり、これを用いるということは、連の主宰者であることを意味するからである。

絵は入っていないが、嘉永2年（1849）の「故淮南堂翁十七回忌追福狂歌合」兼題募歌摺物（関西大学図書館蔵）を見ると、催主が「の一八重垣総連」となっていて、その撰者が「有歓堂大人君」である。

しかし、私は長い間、「有歓堂」の正体を解明できなかった。ところが偶然に、狩野快庵編『狂歌人名辞書』（1928）に「鈴丸」の項があるのを見つけた。そこには「有歓堂鈴丸、南部左衛門尉、真顔門人、後ち判者となる。」とあった。迂闊であった。『狂歌人名辞書』は狂歌研究者にとって基本書中の基本書だからである。19世紀前半の「南部左衛門尉」といえば、八戸藩8代藩主、南部信真（1778～1846）である。しかし、そこから進まない。南部信真が有歓堂鈴人という名で狂歌を詠んだという裏付けが取れないのである。ただ、信真の兄で八戸藩7代藩主、南部信房が五梅庵畔李と号した著名な俳諧大名だったこと、その側室が花月堂李州という俳人だったことを想起すると、「花月庵雪友」と「花月堂李州」の類似など、たぶんそうだろうなあと思うのであるが。

ところが、もし、有歓堂が南部信真だとすれば、大きな疑問が残る。南部信真が弘化3年暮に亡くなっていることである。そうであれば、弘化5年以降の「新年の猿回し」と「故淮南堂翁十七回忌追福狂歌合」の「有歓堂」は別人ということになるからである。

『狂歌人名辞書』の「真顔門人」というのも疑問が残る。見てきたように、賛馬窓鈴麿→有歓堂鈴丸という狂歌師は、淮南堂眉住門であり、それ以前の狂歌歴を確認できない。

今回の美術の窓は、中途半端な報告になったことをご容赦願いたい。これ以上調べが進まないような予感があり、そうであれば、「有歓堂」のことを記さずに終わるのが少し残念な気がしたからである。



広重画『の一月並画讃集』（大英博物館 1979, 0305, 0. 321）より。
右上に「「賛馬窓鈴麻呂公」」の狂歌あり。

季刊 美のたより No.232
令和７年 ９月 26日
発行 大和文華館

Copyright © The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.